馬場ノ下遺跡発掘調査概要

—府営中山間地域総合整備事業「天王地区」の調査・Ⅱ—

2003年3月

大阪府教育委員会

はしがき

天王地区遺跡群の所在する豊能郡能勢町天王地区は、北摂山地の山々に囲まれた標高520m前後を測る山間小盆地に位置し、大阪府では極めて希少な山と緑に囲まれた地域であります。

今回の馬場ノ下遺跡の発掘調査は中山間地域総合整備事業「天王地区」に先立って、平成14年度に実施したものであります。当該地区の発掘調査は、平成13年度に当該予定地内の遺跡確認調査を実施し、その結果に基づき発掘調査を実施したものであります。

馬場ノ下遺跡が存在する豊能郡能勢町内には、大里遺跡、野間遺跡など数多くの遺跡が存在し、それらに対して数多くの発掘調査が実施され、それに基づいての研究、報告がなされていました。しかし、天王地区においては、これまでほとんど遺跡が知られていませんでした。しかし、前年度の遺跡確認調査および引き続き行われた、今年度の馬場ノ下遺跡の調査によって、小規模ではありますが、この山間小盆地内にも遺跡が存在することが明らかになりました。これらは、今後北摂山地内の遺跡、開発の歴史を考える上で重要な資料となるものと考えます。

最後になりましたが、発掘調査にあたってご協力いただきました能勢町教育委員会、北部農と緑の総合事務所池田分室、天王地区土地改良区、地元自治会各位をはじめとする多くの関係者の方々に厚く感謝いたしますとともに、今後とも文化財保護行政について変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成15年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長

小林　栄

例　　言

1. 本書は、大阪府教育委員会が、大阪府環境農林水産部の依頼を受け中山間地域総合整備事業「天王地区」に先立って実施した豊能郡能勢町天王所在、馬場ノ下遺跡の発掘調査概要である。

2. 現地調査は、文化財保護課調査第一グループ技師奥和之が担当し、それに伴う整理作業は、調査管理グループ技師山田隆一、小浜成が平行して行い、平成15年３月全ての作業を終了した。

3. 調査に要した経費は、農林水産省および文部科学省の補助金を得て、大阪府環境農林水産部および大阪府教育委員会が負担した。

4. 調査の実施にあたっては、豊能郡能勢町教育委員会、大阪府環境農林水産部、大阪府北部農と緑の総合事務所池田分室、天王地区土地改良区、東金誠（能勢町教育委員会）をはじめとする諸機関、諸氏の方々の協力を得た。

5. 本調査の写真測量は、株式会社アイシーに委託した。なお、撮影フィルムについては、株式会社アイシーにおいて保管している。

6. 本書の編集は、奥が担当し、執筆は奥の他に第２章第４節出土遺物の縄文時代の項については、調査管理グループ資料総括主査大野薫が行った。

5. 本概要は、３００部作成し、一部あたりの単価は９９８円である。

凡　　例

1. 座標については平面直角座標（第Ⅵ系）、方位については座標北、標高については東京湾平均海水面（Ｔ．Ｐ．）を基準とした。
2. 土色の色調については、小山正忠・竹原秀雄　「新版標準土色帳」　日本色彩研究所　1992を使用した。
3. 遺構番号については、調査区毎に個々の遺構に１から順番に付けた。また、全体でひとつの形をなすものについては、改めて番号を付けた。
4. 遺物については、挿図、図版の番号と一致させた。

目　　次

はしがき
例言
目次
第１章　はじめに……1
第２章　調査の概要……3
　第１節　概要……3
　第２節　１区の調査……3
　第３節　２区の調査……13
　第４節　出土遺物……14
第３章　まとめ……17
報告書抄録……20

挿　図　目　次

第１図　大阪府と調査地点……1
第２図　天王地区の遺跡と調査地区……2
第３図　調査区配置図……2
第４図　１区基本層序図……3
第５図　１区平面図……4
第６図　建物１平面・断面図……5
第７図　遺構出土遺物……5
第８図　土坑14平面・断面図……6
第９図　溝状遺構平面・断面図……7
第10図　樹木根痕跡平面・断面図１……8
第11図　樹木根痕跡平面・断面図２……9
第12図　樹木根痕跡７群　ＳＸ１出土遺物……10
第13図　樹木根痕跡平面・断面図３……11
第14図　樹木根痕跡６群焼土塊出土状況……12
第15図　２区平面図……13
第16図　２区基本層序図……13
第17図　２区出土遺物……13
第18図　１区遺物包含層出土遺物１……14
第19図　１区遺物包含層出土遺物２……16
第20図　出土土器集計図……16

表　目　次

表１　天王村持高階層区分表……20

図 版 目 次

表紙　調査地区遠景（東上空より）

図版１　全景（空中写真）

図版２　１区

１．全景（東より）

２．全景（西より）

３．基本断面（東壁）

４．基本断面（西壁）

図版３　１区

１．建物１（北より）

２．建物１　ＳＰ41根石（北より）

３．土坑14断面（南より）

４．土坑14焼土検出状況（東より）

図版４　１区

１．溝状遺構（東より）

２．溝状遺構断面（西より）

３．１群　ＳＸ15断面（東より）

４．２群（東より）

５．３群（西より）

６．３群　ＳＸ15断面（東より）

７．４群（西より）

８．４群　ＳＸ13断面（東より）

９．５群　ＳＸ12断面（東より）

10．ＳＸ16断面（南より）

図版５　１区

１．６群（西より）

２．６群　ＳＸ６焼土（南より）

３．６群　ＳＸ６焼土断面（西より）

４．６群　ＳＸ７焼土断面（南より）

５．６群　ＳＸ７（東より）

６．６群　ＳＸ３焼土

７．６群　ＳＸ３断面（西より）

図版６　１区・２区

１．５群（西より）

２．６群　ＳＸ５断面（東より）

３．７群（西より）

４．７群　ＳＸ１遺物出土状況（西より）

５．２区全景（西より）

６．２区基本断面（東壁）

図版７　出土遺物

１．１区包含層出土遺物

２．樹木根痕跡７群　ＳＸ１出土遺物

３．１区　石器表面

４．１区　石器裏面

第１章　はじめに

今回発掘調査を実施した豊能郡能勢町天王地区（第１、２図、図版表紙）は、大阪府の北西端部、北を京都府船井郡園部町、西を兵庫県篠山市、南を兵庫県川辺郡猪名川町と接している。地形的にみると、東の能勢町山辺地区との距離約７㎞、標高差約310m、西の篠山市福住地区との距離約６㎞、標高差約270mを測る北摂山地内に存在する標高490m前後の山間小盆地に立地している。

第１図　大阪府と調査地点

天王地区は、東西約2.6㎞、南北約0.1㎞を測る細長い山間小盆地を中心とする地域で、その地区内を、西流方向から当該地区西端で南流方向に変わる猪名川の支流である天王川が蛇行を繰り返しながら流れている。天王川には、国の天然記念物であるオオサンショウウオが生息し、その生息環境を保護するため様々な措置が執られている。

今回の発掘調査の経緯となった中山間地域総合整備事業「天王地区」は、山間盆地の比較的傾斜のきつく狭小不整形で統一性のない耕地を、農業経営の合理化並びに水田利用再編対策事業により整備する事業である。

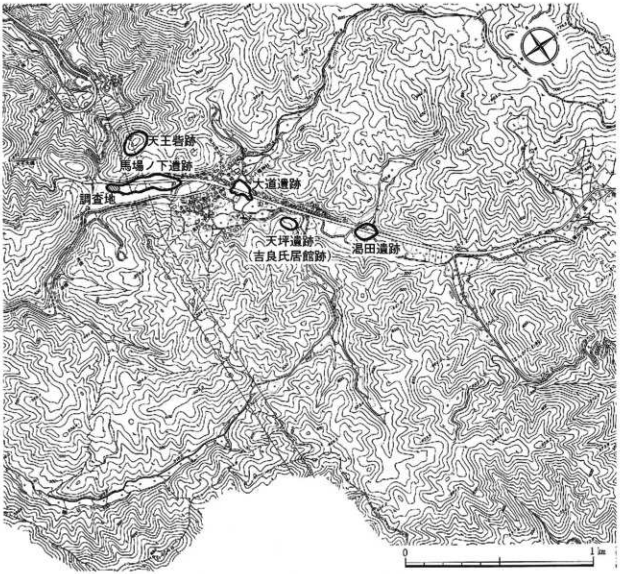
豊能郡能勢町天王地区内の圃場整備事業については、対象地域内には周知の遺跡は認められないものの、地形的にみて遺跡が存在する可能性が高い地域も存在することから、大阪府農林環境水産部と協議を行い、その依頼に基づき平成13年度に対象地域全域の遺跡確認調査を実施した。その結果、地区内の中央西、南の山塊から派生する支脈上に、以前から知られていた天坪遺跡、天王砦跡の他に、馬場ノ下遺跡、大道遺跡、渇田遺跡（第２図）[注]が新たに発見された。

今回の調査は、前年度の遺跡確認調査の結果を受け、大阪府教育委員会と大阪府環境農林水産部と協議を行った結果、遺跡のほとんどは基本的に盛土によって遺跡の保存を図るが、切土により遺跡が破壊される地域に限定して発掘調査を行うこととなった。平成14年度については、馬場ノ下遺跡について遺構が破壊される面積約1472㎡（第３図）に限定して調査を行うこととなった。

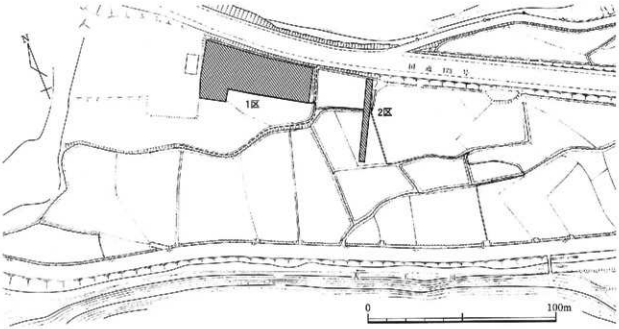
発掘調査は、大阪府教育委員会が、平成14年６月に開始し平成14年８月に終了した。

調査の方法は、基本的に耕作土層を大阪府環境農林水産部によって除去した後、バックホウによって厚さ約0.1mの盛土層、床土層を除去した。その後人力により厚さ約0.2mの遺物包含相当層を地山まで掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

註＞　大阪府教育委員会　「天王地区遺跡確認調査概要」　2002



第２図　天王地区の遺跡と調査地区



第３図　調査区配置図

第２章　調査の概要

第１節　概要

馬場ノ下遺跡（第２図、図版２）は、天王地区の最も西側に位置し、遺跡の範囲は、北の山塊から南に派生する支脈の丘陵端部と南に存在する天王川および氾濫源に挟まれた丘陵縁辺部に立地する。遺跡の規模は、平成13年度に実施した遺跡確認調査により、東西約400m、南北約100mの範囲と推定される。

今回の調査対象地区は、遺跡の西端付近にあたり、調査は農業用水路予定地および圃場整備工事によって遺構が破壊される地区を対象として行った。調査区（第３図）は、２地区に分かれ、調査面積は約1471㎡を測る。検出した遺構は、建物１棟、土坑１基、溝１本、溝状遺構１本、樹木根痕跡８群などである。

第２節　１区の調査

1. 概要

１区（第５図、図版２－１・２）は、X＝－106,180、Y＝－59,020付近を中心として、東西約58m、南北約20mを測るほぼ長方形に近い調査区である。調査面積は、約1322㎡を測る。検出した遺構は、建物１棟、土坑１基、溝１本、溝状遺構１本、樹木根痕跡８群などである。

2．基本層序（第４図、図版２－３・４）

層序は、基本的に各層の厚さの違いは認められるもののほぼ同様な堆積状況を呈している。

以下、各層の概要を記述する。

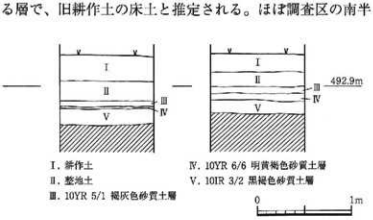
Ⅰ層　耕作土層で層厚約0.2mを測る。

Ⅱ層　現耕作土の整地土で厚さの違いはあるものの、ほぼ調査区全域に広がる。層中に近世の遺物を少量含む。層厚0.05mから0.3mを測る。

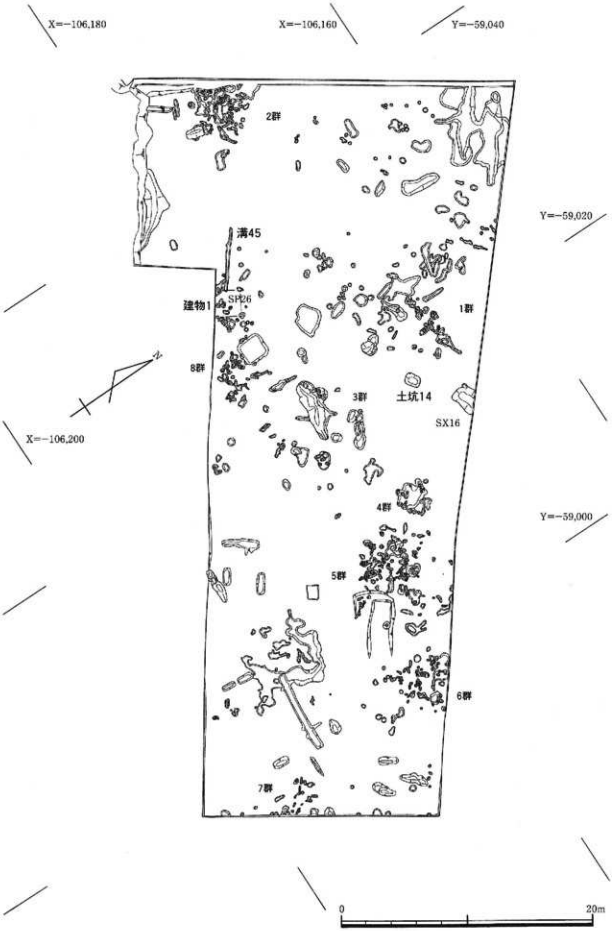
Ⅲ層　褐灰色砂質土を基本とする層で、旧耕作土と推定される。ほぼ調査区の南半に広がる。層厚0.05mから0.1mを測る。

Ⅳ層　明黄褐色砂質土を基本とする層で、旧耕作土の床土と推定される。ほぼ調査区の南半に広がる。層厚約0.05mを測る。

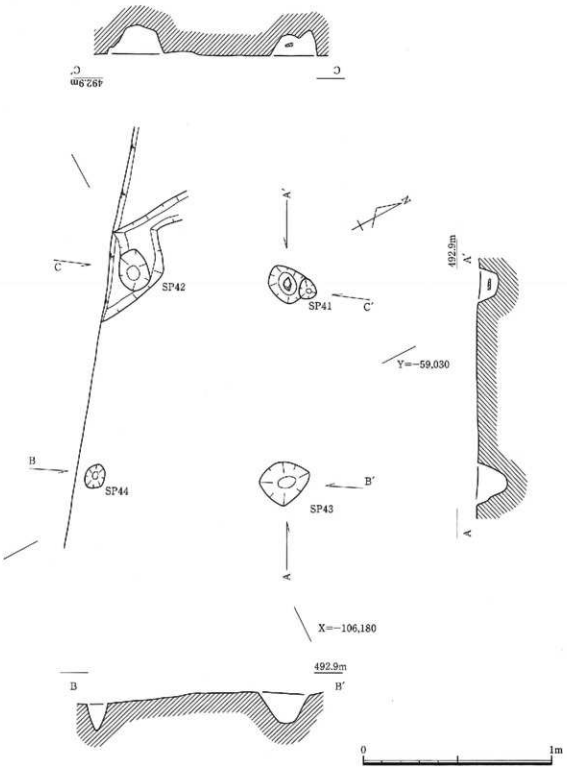
Ⅴ層　黒褐色砂質土を基本とする層で、本調査区の遺物包含層で中世の遺物を基本的に含む。層厚0.05mから0.2mを測る。



第４図　１区基本層序図


X=−106,180
X=−106,160
Y=−59,040
Y=−59,020
Y=−59,000
X=−106,200
2群
溝45
建物1
SP26
1群
8群
3群
土坑14
SX16
4群
5群
6群
7群
0
20m

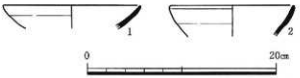
第5図　1区平面図



第６図　建物１平面・断面図

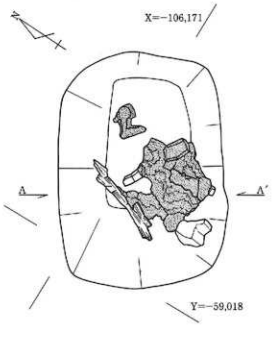
３．調査の成果

建物１（第６図、図版３－１）　調査区の南西側X＝−106,180、Y＝−59,030付近で検出した。今回の調査で検出した唯一の建物跡である。建物の南側のほと



第７図　遺構出土遺物

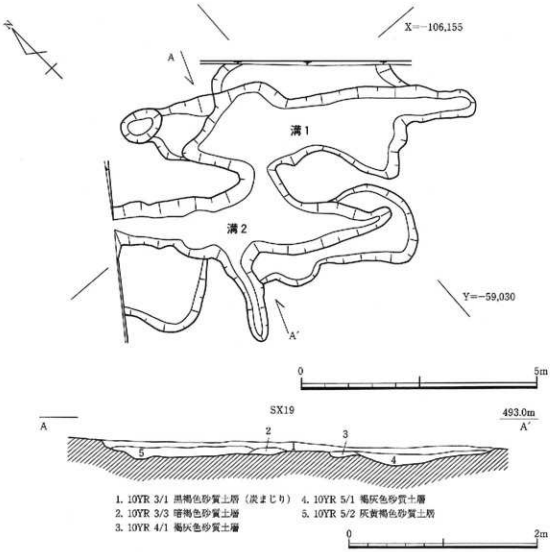
んどが調査区外に存在するため規模は不明である。しかし検出した地点が、南側に存在する天王川の氾濫源と推定される地域に約6mと近いことから、大規模な建物にはならないものと推定される。建物は、基本的に梁間1間（約2.1m）、桁行1間（約2.1m）以上を測る。柱穴は円形に近い形を呈し、径0.25mから0.45m、検出面からの深さ0.2mから0.3mを測る。建物の北西端の柱穴（SP41）の底部付近から、根石（図版3－2）と推定される長さ約0.1m、幅約0.08m、厚さ0.03m程度の扁平な河原石が出土している。柱穴内から遺物は出土しなかったが、周辺の遺構からの出土遺物（第7図）から、時期は中世と推定される。



第8図　土坑14平面・断面図

土坑14（第8図、図版3－3・4）　調査区の中央付近X＝−106,171、Y＝−59,017.5で検出した。平面形で隅丸長方形を呈する土坑で、長辺約1.24m、短辺約8.7m、深さ約0.27mを測る。上面から底面にかけて緩やかに下り、底面はフラットに近く、長辺約0.68m、短辺約0.45mを測る。土坑の埋土は、凹レンズ状に堆積し、最上層の褐灰色砂質土（炭・焼土混じり）層底部付近には、長さ約0.5m、幅約0.33m、厚さ約0.05mの赤褐色を呈する焼土塊を検出した。焼土塊は、炉壁の一部とも考えられるが、面取りなどの痕跡が認められなかったため、不明な点が多い。また、焼土塊と同一層に炭化物片が出土している。それに加え各埋土層中には、炭および焼土の細片が多量に混在している。これらのことから高温を伴う作業が周辺で行われたものと推定され、土坑はそれに伴う遺構と推定されるが、鉱滓などのそれらに伴う遺物が出土しなかったため用途は不明である。遺物は、焼土塊の他に炭化物が出土したが、土器はなかったことから時期の決め手には欠けるが、周辺から出土した遺物から中世と推定される。

溝状遺構（第9図、図版4－1・2）　調査区の北西端付近X＝−106,156、Y＝−59,031付近を中心として検出した。平面形ではほぼ平行に東西に走る2本の溝状の落ち込みである。溝1はX＝−106,157、Y＝−59,027付近から西へ伸び、X＝−106,153、Y＝−59,030付近で収束する。幅約1.2m、深さ約0.1mを測る。溝2はX＝−106,158、Y＝−59,029付近を始点とし、西の調査区外へ伸びる。幅約1.3m、深さ約0.2mを測る。それらの溝は、X＝−106,156、Y＝−



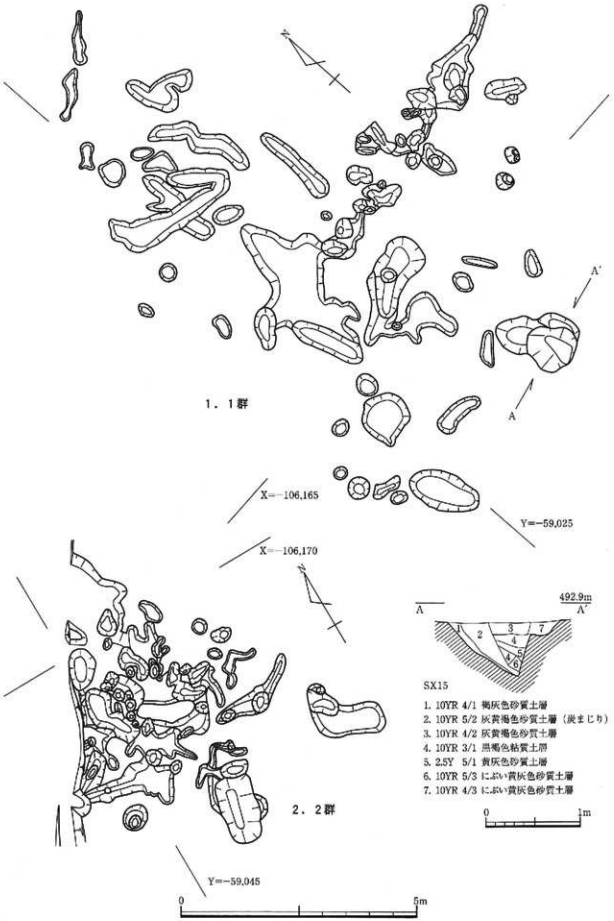
第９図　溝状遺構平面・断面図

59,044付近で幅約0.8mの溝状の落ち込みによって連結している。断面、平面とも形状が不定形であることから自然のものであると判断した。溝は、溝２の底部の一部に薄く砂層が堆積している部分が認められたことから、降雨時には水が流れていたものと推定される。遺物は図化出来なかったが、瓦器の細片が出土した。時期はこの遺物から中世と推定される。

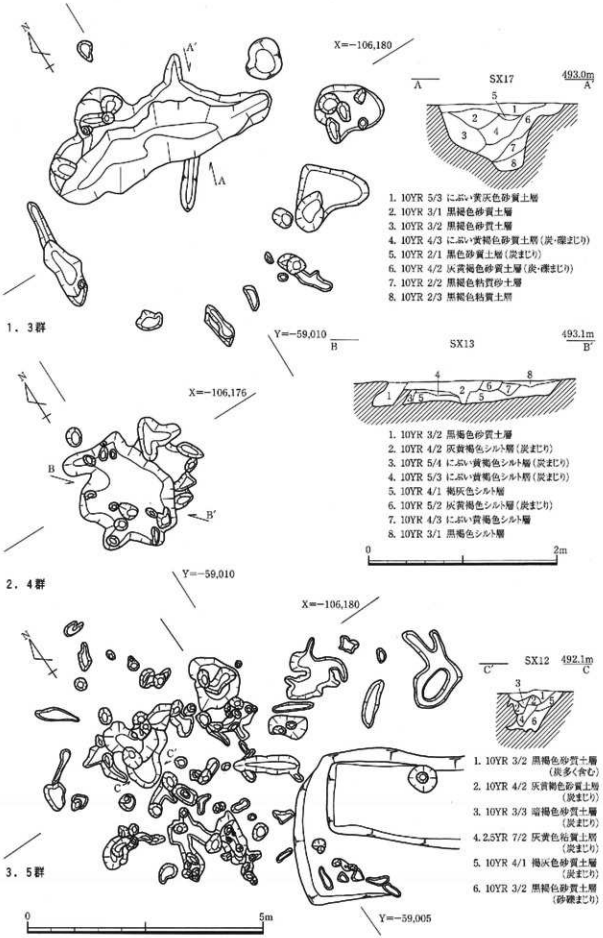
溝45（第５図）　X＝−106,179、Y＝−59,032付近からX＝−106,177、Y＝−59,036付近で検出した東西に伸びる溝である。幅約0.15m、深さ約0.05mを測る。溝埋土中より図化は出来なかったが瓦器の小片が出土している。

その他の遺構（第５図）　建物１内で検出した柱穴と推定されるＳＰ26は、径約0.3m、深さ約0.16mを測る。南の調査区外と約1.2mと近く、単独で存在するものか、建物になるものかは不明である。柱穴内部より瓦器片（第７図）が、２点出土している。

樹木根痕跡　今回の調査で最も多く検出した。遺構検出時には、埋土が周辺の地山と全く異なる色調、質を呈していたこと、殆どすべての埋土中に炭化物の小片が混入していることから、当



第10図　樹木根痕跡平面・断面図1



第11図　樹木根痕跡平面・断面図２

初は、柱穴ないしは不定形な土坑、溝の集まりとして捉えていた。しかし、遺構掘削の時点で、不規則な掘り方を呈すること、遺構の掘り方が地山に対して斜めに入り込むものが多く認められたことなどから、木の根の痕跡であると判断した。これらは群単位に存在し、これらの痕跡の方向からほぼその中央部分に樹木が林立していた可能性が高いものと判断した。これらは8群存在する。それらの中には、埋土中に焼土塊が存在するものもある。

1群（第10－1図、図版4－3）　調査区の西北側X＝－106,172、Y＝－59,024付近を中心として東西約11.0m、南北約10.0mの範囲に広がる。

2群（第10－2図、図版4－4）　調査区の西南端、X＝－106,171、Y＝－59,045付近を中心として、形状から西の約半分は調査区外に存在するものと推定される。東西約4.5m以上、南北約5.0mを測る。

3群（第11－1図、図版4－5・6）　調査区の中央南側、X＝－106,181、Y＝－59,020付近を中心として東西約8.0m、南北約6.0mの範囲に広がる。その中の約3分の1を占めるSX17は、平面形では不定形な土坑状を呈し、長さ約5.0m、最大幅1.7m、深さ約0.87mを測る。その断面は、検出面から低部に向かって「V」字状に落ち込む。これらから、用途は不明だが木の根の痕跡とは言い難いところもある。

埋土の各層中には、炭、焼土塊の小片が多量に混入している。遺物は、図化は出来なかったが、瓦器の小片が上層のにぶい黄褐色砂質土層より出土している。

4群（第11－2図、図版4－7・8）　調査区中央北側、X＝－106,177、Y＝－59,010を中心として東西約3.1m、南北約3.2mの小規模な範囲に広がる。

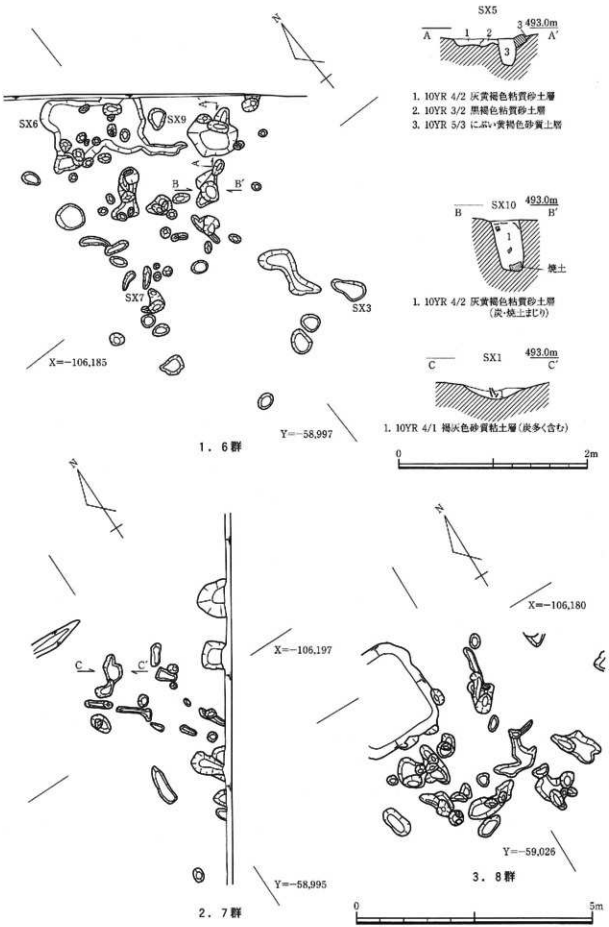
5群（第11－3図、図版4－9・6－1）　調査区中央北側、X＝－106,181、Y＝－59,を中心として東西約9.2m、南北約5.0mの範囲に広がる。

6群（第13－1図、図版5・6－2）　調査区東北側、X＝－106,183、Y＝－58,997を中心として東西約7.0m、南北約6.0mの範囲に広がる。北の一部は、調査区外に存在するものと推定される。群中のSX3、6、7、9、10（第13－1、14図、図版5－2～7）の一部より焼土塊が多量に集中して出土した。焼土塊は不定形な形を呈し、壁面を整形した痕跡も認められなかった。これらの周辺で高温を伴う作業が行われていたものと推定されるが、鉱滓などの遺物が出土していないので用途は不明である。

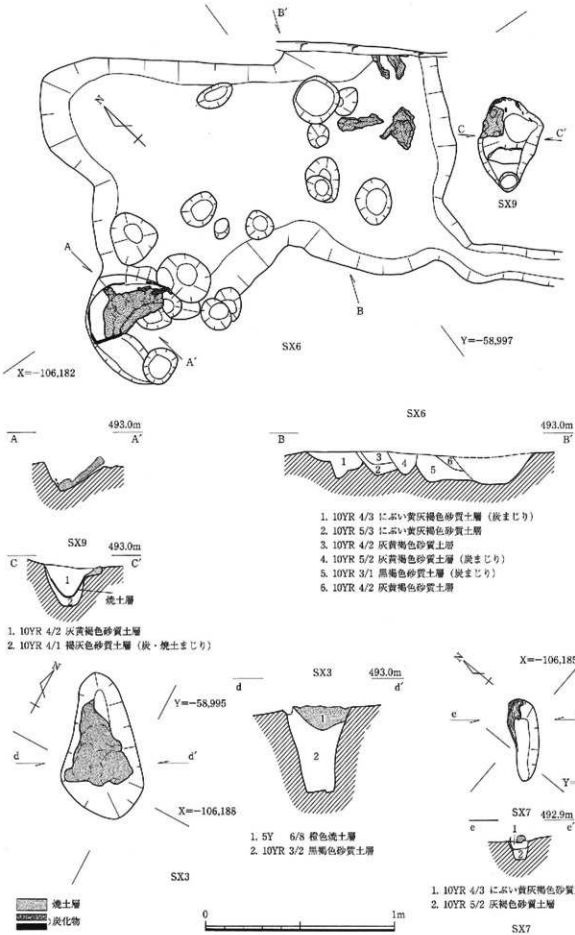
7群（第13－2図、図版6－3・4）　調査区東端南側、X＝－106,997、Y＝－58,994付近を中心として、東の約半分は群の形状から調査区外にあるものと推定される。形状から東西約3.0m、南北約5.1mの範囲に広がるものと推定される。群中のSX1（第13－2図）より瓦器椀（第12、図版6－4・7－3）が出土している。

8群（第13－3図）　調査区中央より南西端側、X＝－106,182、Y＝－59,026を中心として東西約4.4m、南北約4.0mの小規模な範囲に広がる。

第12図　樹木根痕跡7群　SX1出土遺物



第13図　樹木根痕跡平面・断面図3



第14図　樹木根痕跡６群焼土塊出土状況

第３節　２区の調査

１．概要

２区（第15図、図版６－５）は、１区の東へ約30m、X＝－106,207、Y＝－58,962付近からX＝－106,245、Y＝－58,985付近までの東西幅約3.4m、南北長約44.0mの南北に細長い調査区で面積約150㎡を測る。１区と２区との高低差は0.2m前後２区が低い。

検出した遺構は、溝、溝状の落ち込みなどで、顕著な遺構は認められず、遺物（第17図）の量も少なかった。

２．基本層序

層序（第16図、図版６－６）は、基本的に各層の厚さの違いは認められるもののほぼ同様な堆積状況を示している。

以下、各層の概要を記述する。

Ⅰ層　耕作土層で層厚約0.2mを測る。

Ⅱ層　明黄褐色砂質土を基本とする層で、床土である。層厚約0.05mを測る。

Ⅲ層　黒褐色砂質土を基本とする層で、本調査区の遺物包含層である。厚さの違いはあるものの調査区のほぼ全域に広がる。層厚0.05mから0.15mを測る。

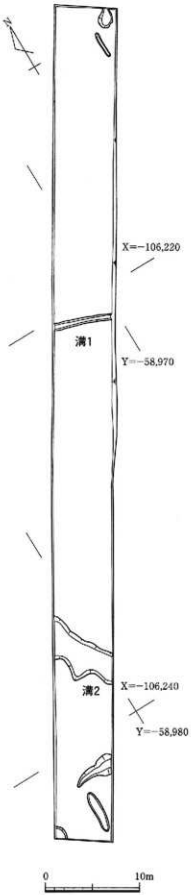
３．調査の概要

２区で検出した遺構は、溝、溝状の落ち込みなどである。溝１、２は、ほぼ東西に伸びる溝で、遺物が出土しなかったが、埋土が耕作土の土と酷似しているため近世の水田耕作に伴うものと推定される。しかし、現地表面に存在する溝とは異なる位置にあること土層断面観察の結果、床土層直下から掘り込まれていることから、これらよりは古いものと考えている。

これらから、中世の遺物は出土するものの、その時期の遺構は検出しなかったことから、遺跡の範囲内ではあるが遺構はこの周辺には及んでいないものと推定される。

第17図　２区出土遺物

第16図　２区基本層序図



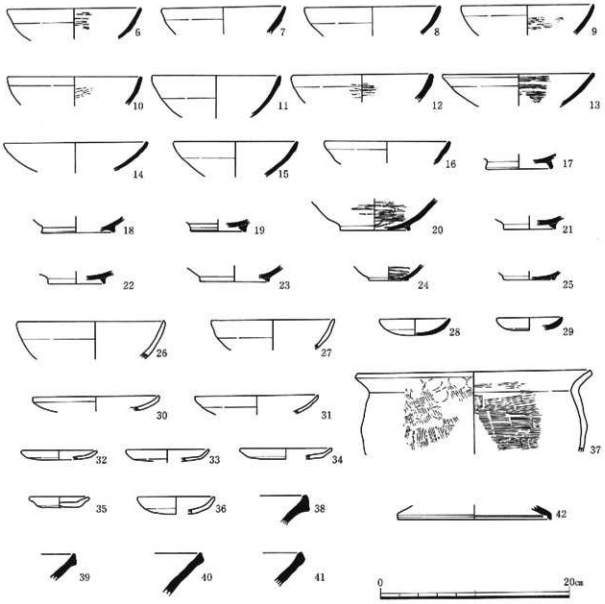
第15図　２区平面図

第４節　出土遺物

１．概要

今回の調査で出土した遺物は、遺構内からはきわめて少なく、遺物包含層である黒褐色砂質土層中より数多く出土した。遺物の量は、中世のものが最も多く、全体の98％以上を占める。次に縄文、平安時代と続く。

調査区内で遺物の出土地区（第20図）を見ていくために任意に地点ごとにａからｋまでの地区を設定し、遺物の出土量を調べた。その結果、遺物包含層の有無、厚さの違いはあるものの、調査区の西側のｅ地点が最も多く、3125ｇ中1250ｇを占める。次にｂ地点の345ｇ、ｇ地点の280ｇとその周辺に広がる。最も多く土器が出土したｅ地点は、今回の調査で唯一建物を検出した地点で、遺物の量とも合致する。



第18図　１区遺物包含層出土遺物１

2．中世の遺物

出土した中世の遺物（第18図、図版７）は、瓦器（椀、小皿）、土師器（椀、皿、小皿）、須恵器（片口鉢）であり、輸入陶磁器は１点もなかった。

瓦器椀は、いわゆる丹波型[注1]に比定されるもので、おおまかにみて３タイプのものが存在するものと推定される。

１タイプは、土器の器壁は比較的厚く、口縁端部から底部にかけてやや丸みを帯びて下り、高台は、外に大きく張り出し角張るもの（６～９、17～19）。２タイプは、土器の器壁は１タイプに比べて薄く、口縁端部から底部にかけて丸みを帯びて下り、高台は外にやや張り出し丸く収めるものが多い（10～12、20～23）。３タイプは、器壁は薄く、口縁が大きく開くもの（13、14）とやや斜め上方に開くもの（15、16）の２種がある。また、高台が退化し最終段階のものと推定されるものもある（24、25）。

土師器椀（26、27）は、胎土は瓦器椀とほぼ同様な質であるが、色調、焼成が異なるため、土師器とした。口縁端部は丸みを帯び、口縁から底部に向かって内弯気味に伸びる。

瓦器皿（28、29）は、低部は丸みを帯びやや内弯気味にのびるものである。

土師器小皿は、低部は平たく、低部から外上方に伸るもの（32～35）と低部は丸みを帯びやや内弯気味にのびるもの（36）とがある。いわゆるへそ皿の類は出土しなかった。

須恵器片口鉢（38～41）は、破片が多く、図化できたのは、口縁部の形状のみである。第Ⅱ期２段階のもの[注2]と推定されるもので、口縁部は、やや外反し、端部は上下にやや伸びる。

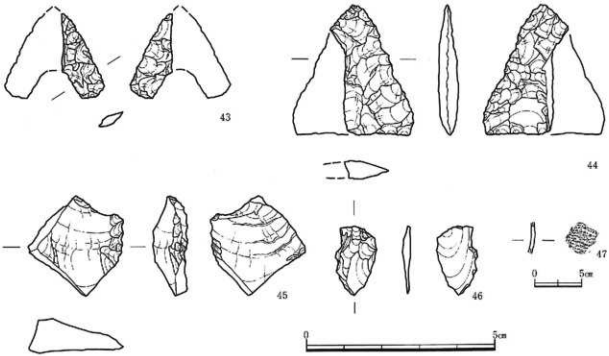
これらから、今回の調査で出土した中世の遺物は、13世紀初頭から13世紀末、14世紀初頭までのものと推定される。

また、須恵器杯蓋（42）は、10世紀頃のものと推定され、１点のみの出土である。縄文時代を除き、それ以前のものは、今のところ出土していない。このことからこの周辺に人々が定住し始めたころのものと推定される。

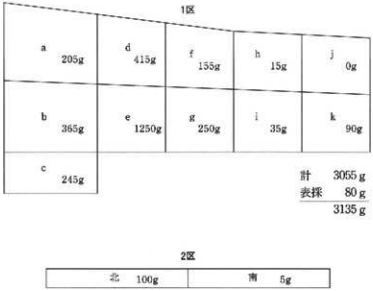
3．縄文時代の遺物

石器（第19図、図版７－43～46）　石器は４点あり、すべて１区出土である。（43）はサヌカイト製石鏃である。中軸ラインで破断しており、片側だけが遺存している。側縁が直線的で、脚部が端部に至って内にすぼまり、基部が大きく抉れるタイプで、縄文時代草創期後半～早期前半に属するとみられる[注3]。側縁には若干斜行し、身に深く入り込む細部調整が認められる。残存長2.21cm、最大幅1.11cm、最大厚0.25cm。

（44）はチャート製の尖頭器で、赤色～灰色を呈する。中軸ラインで破断している。側縁・基部とも直線的で、ほぼ正三角形を呈するタイプと見られる。側縁にはやや斜行する深い細部調整が認められる。A面基部中央から先端に向かう深い剥離面はプライマリーなものではなかろう。縄文時代草創期～早期に属するものである可能性が大きい。長さ3.41cm、最大幅2.21cm、最大厚0.50cm。



第19図　1区遺物包含層出土遺物2



第20図　出土土器集計図

(45) はサヌカイト製の細部調整のある剥片である。最大長2.60cm、最大幅2.50cm、最大厚0.91cm。

(46) は赤色チャートの剥片。A面上端から左側縁にかけて微細な剥離が認められる。最大長1.82cm、最大幅1.09cm、最大厚0.21cm。

縄文土器（第19－47図、図版7）　表面の遺存状況が悪く時期を特定できないが、ここでは縄文時代晩期の粗製土器とみておきたい。表面に残るのは条痕であろうか。残存高3.3cm、暗褐色を呈する。

註>

1）　百瀬正恒『丹波・丹後』　「各地の土器様相」　近畿　概説中世の土器・陶磁器　中世土器研究会　真陽社　1995

2）　森田稔『中世須恵器』　「土師器・陶磁器」　概説中世の土器・陶磁器　中世土器研究会　真陽社　1995

3）　久保勝正「石鏃形態とその変遷　－サヌカイト分布圏からみた様相－」(『縄文時代の石器－関西の縄文草創期・早期－』関西縄文文化研究会、2002)

第3章　まとめ

豊能郡能勢町は、大阪北部の山間盆地に位置するにも拘わらず数多くの遺跡・古墳が知られ、それらについては、学術調査、圃場整備に伴う発掘調査を中心として、数多くの調査、研究が成されている。これらによって数々の調査、研究成果が得られ、能勢町内における遺跡の状況が徐々にではあるが、明らかになりつつある。しかし、能勢町内で最も高所に位置する集落である天王地区周辺は、平成13年度に実施した遺跡確認調査までは、天王地区の集落の南側丘陵上に天坪遺跡と命名された吉良氏居館跡と呼ばれている平坦地、また現在の所大阪府文化財分布図(2001)には記載されてはいないが、馬場ノ下遺跡より北の山塊に中世と推定される天王砦跡(出1)が、遺跡分布調査などで確認されているのみで、実体が全く不明の地域であった。

今回の馬場ノ下遺跡の発掘調査は、能勢町天王地区内において本格的な調査は初めてである。検出した遺構は、中世と推定される小規模な建物1棟、焼土塊を伴う土坑1基などと極めて少ない。しかし、今回の調査により、標高490m前後と周辺の集落よりも300m前後高い小盆地においてさえも、中世には小規模ながら集落が営まれていたことが明らかとなり、能勢町内での新知見が加わった。

また、遺構ではないが樹木根痕跡がある。その内部より少量ではあるが中世の遺物、また6群を中心としてその周辺から焼土塊が出土している。このことから、中世の時点において、この周辺の丘陵縁辺部まで林立していた、樹木を切り倒し、根まで取り除き、居住ないしは作業するための空間を作りだしたものと推定される。

そこで前述したように、焼土塊が樹木根痕跡、土坑内より出土し、その埋土中にも、焼土片、炭片が多量に出土していることから、何らかの高温を伴なう作業が周辺で行われていたものと推察される。鉱滓、フイゴの羽口などが全く出土していないため確証はないが、鍛冶炉が周辺に存在していたものか。もしくは、能勢町周辺は銅鉱石の産地であり、採銅所の記載が11世紀以降、文献(注2)に認められている。そのことから、調査地区は、文献に記載されている中で、一番近い山辺山口が存在する山辺地区からでも、直線距離が約7kmと相当離れてはいるが、これらに関連する遺跡である可能性もある。

天王地区の中世の集落は、発掘調査および遺跡確認調査(出1)の結果に基づき次のように想定している。遺構・遺物を確認しているのは、北の山塊から派生する丘陵縁辺部に存在する旧街道沿いに沿って馬場ノ下遺跡、大道遺跡が存在する。これらより離れた地区には、同じ街道沿いに渇田遺跡がある。

これらの他に地形的に見て最も遺跡が存在する可能性の最も高いと考えられた、天王地区西側の南の山塊から派生する丘陵の縁辺部周辺にも平成13年度の遺跡確認調査においてトレンチを設定し遺構の有無を確認したが、遺物は極少量出土するものの、明確な遺構は検出されかった。ただ、天坪遺跡周辺に設定したトレンチからは、中世の遺物が他の地点より多く出土したが、明確

な遺構および遺物包含層が検出されなかったため遺跡ではなく、天坪遺跡からの流れ込みであると判断している。

このことから天王地区の現在の集落は、盆地の中央より西側の北と南の山塊から派生する丘陵縁辺部に集中しているが、これらから中世の集落は、個々の規模は大きくないものの、北の山塊から派生する丘陵縁辺部に存在する旧街道沿いに存在していたものと推定している。これらは、集落への日当たりのことも関係しているのであろうか。

そしてこれらの遺跡からの出土遺物の量は、他の同様な遺跡と比較して少ないことから、集落の構成人員は限られていたものと考えられる。このことは、文禄3年（1594）に実施された検地帳からも推定できる。検地帳に記載されている農民の数は総数16人で、耕作されている水田が16反であり、その内耕地が3反未満のものが10人を占めている。また、屋敷地を持っていないのが5人であることも記載されている（表1）。後年の延宝6年（1678）の天王村の惣百姓の口上書[註5]によると、石高は、天正19年の検地の時に40石9斗5升（6142.5kg）とされ、文禄3年の検地の際に、58石9斗7升（8845.5kg）に改められたと記載されている。

持高階層区分	
20反以上	
15～20反未満	
10～15反未満	
6～8反未満	1（1）
4～6反未満	3
3～4反未満	2
2～3反未満	4（1）
1～2反未満	4（2）
0～1反未満	2（1）
計	16（5）
主なし地（永荒）	32畝0歩
田畑屋敷地層面積	489畝25歩

（　）内は屋敷地のないもの（内数）を示す
能勢町史第1巻520ページの表から転載（一部改変）

表1　天王村持高階層区分

この時期の人口は、1家族6人前後であるとすれば、少なくとも100人前後の人々が周辺に居住していたことになる。このことから少ない耕地面積で、周辺より高地に存在するため石高の少ないこの地で生計をたてていたものと推定される。これより遡ること200年前の遺構を検出した中世（14世紀初頭）には、集落の人口、耕地面積共にこれより少なかったものと推察される。

また、文禄3年以降開墾により田畑が増加されたものと考えられ、85年後の延宝7年の検地帳によると、田畑面積が12町、石高が173石3斗余り、農民数は56人と3.5倍に増加している。[註5]

このことから特に天王地区の東側については、遺跡の密度、現在の集落の在り方から推察すると、中世には渇田遺跡周辺を除き、地形的に見て山林ないしは荒地であった可能性が高い。

これらのことから、中世の天王地区は、集落というよりも散村という風景を醸し出し、一部を除き集落というよりも小規模な屋敷地、建物が点在していたものと推察される。[註6]

馬場ノ下遺跡で出土した遺物には、輸入陶磁器が認めらないこと、検出した建物が小規模であったことなどから、時期は異なるが、文禄3年に実施された検地帳に記載されている3反以下の屋敷地を持たない零細農民の住居であるか、焼土塊を作り出した作業に伴う作業小屋であったものではないかと考えている。

天王地区周辺の文献については、中世末期からのもので、それ以前のものは全く知られていない。しかし少なくとも、今回の発掘調査、前年度の遺跡確認調査の結果から、中世には集落が存在していたことが明らかとなった。また、遺物包含層からは、平安時代初期と推定される須恵器

杯蓋片（第18－42、図版７－42）が、１片であるが出土していることから、平安時代初期には極小規模であるが、少なくとも人々が居住していた可能性を示唆している。

また、出土した遺物の量は少ないが、縄文時代と推定される石器、土器が出土している。それらの中で縄文時代草創期後半から早期前半に比定される石器（第20－43、44図、図版７－43、44）が存在することは注目に値する。それに伴う遺構と思われるものは、検出しなかったが、定住とはいかないものの、この周辺に居住していた可能性はおおいにある。

天王地区内の圃場整備事業（府営中山間地総合整備事業「天王地区」）に伴う発掘調査は、来年度も引き続き行われる予定である。今年度の調査成果を合わせて、中世における小山間盆地の開発と集落構造が、文献だけからではなく、考古学の視点からもより明らかになるものと考えている。今後の調査、研究に期待したい。

註＞

1）高橋成計　「能勢町中世城郭分布図」　能勢町史　第1巻　能勢町　2001年
2）丹生谷哲一　「能勢郡採銅所」　（『平安末期の能勢地方』　中世前期　中世）　能勢町史　能勢町　2001年
　丹生谷哲一　採銅所の変質　南北朝動乱下の能勢地方　中世後期　中世　能勢町史　能勢町　2001年
　丹生谷哲一　応仁の乱前後の採銅所　室町後期の能勢地方　中世後期　中世　能勢町史　能勢町　2001年
3）大阪府教育委員会　「天王地区遺跡確認調査概要」　2001年
4）山崎隆三　文禄検地帳にみられる農村構造　秀吉・家康政権下の能勢　近世社会の成立　能勢町史　能勢町　2001年
5）能勢町　「２５９号文書」　能勢町史　第３巻　2001年
6）山崎隆三　その後の農村構造の変化　秀吉・家康政権下の能勢　近世社会の成立　能勢町史　能勢町　2001年

報　告　書　抄　録

ふりがな	ばばのしたいせきはっくつちょうさがいよう
書　　名	馬場ノ下遺跡発掘調査概要
副 書 名	府営中山間地域総合整備事業「天王地区」の調査・Ⅱ
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	奥　和之
編集機関	大阪府教育委員会　文化財保護課
所 在 地	〒540-8571　大阪府大阪市中央区大手前２丁目　TEL　06-6941-0351
発行年月日	2003年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	面積 (m²)	調査原因
馬場ノ下遺跡	豊能郡能勢町 天王地内	27322	210	35° 02′ 18″	135° 21′ 20″	2002年６月～ 2002年８月	1,471	府営中山間地域総合整備事業「天王地区」

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
馬場ノ下遺跡	集落跡	中　世	建物跡　１棟 土坑　１基 溝　１本 溝状遺構　１本 柱穴	瓦　器 土師器 須恵器 縄文土器 石　器	遺構ではないが、樹木根痕跡８群を検出した

馬場ノ下遺跡群発掘調査概要

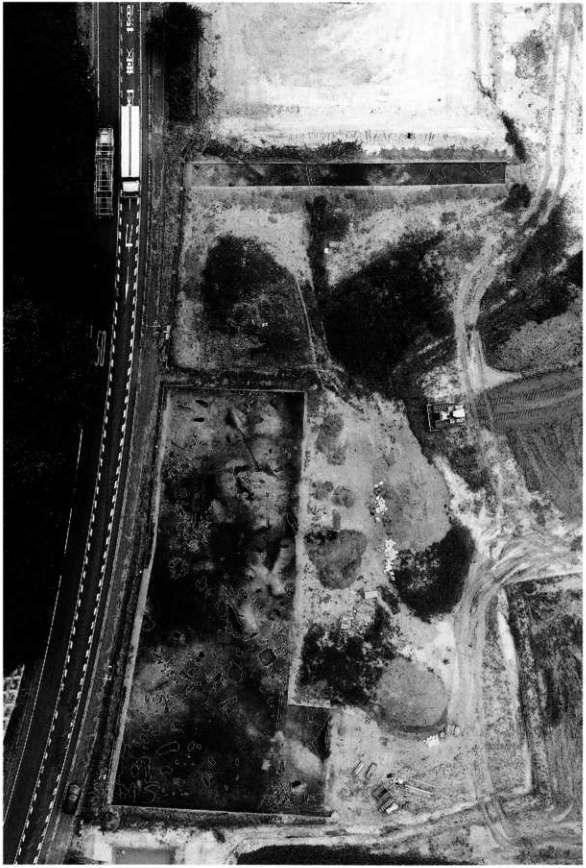
－府営中山間地域総合整備事業「天王地区」の調査・Ⅱ－

発　行　　大阪府教育委員会
〒540-8571
大阪市中央区大手前２丁目
TEL　06-6941-0351
発行日　　2003年3月31日
印　刷　　株式会社　中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2－6－8
TEL　06-6976-8761

図　　版

調査地区全景（東上空より）

図版１
全景（空中写真）



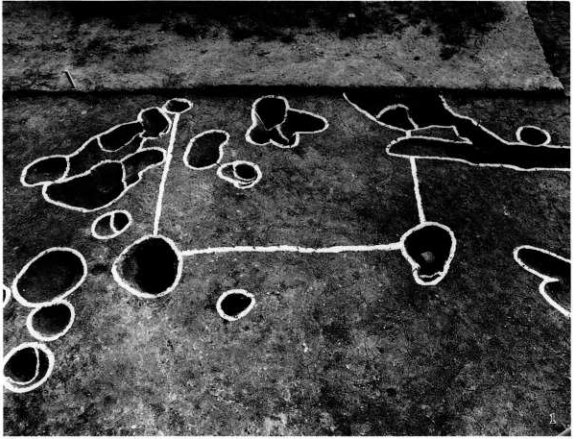
図版２
１区

１．全景（東より）

２．全景（西より）

３．基本断面（東壁）
４．基本断面（西壁）

図版３
１区



１．建物１（北より）

２．建物１
　ＳＰ41根石（北より）
３．土坑14断面（南より）

４．土坑14焼土
　検出状況（東より）

図版4
1区

1．溝状遺構（東より）
2．溝状遺構断面（西より）

3．1群
SX15断面（東より）
4．2群（東より）

5．3群（西より）
6．3群
SX15断面（東より）

7．4群（西より）
8．4群
SX13断面（東より）

9．5群
SX12断面（東より）
10．SX16断面（南より）

図版５
１区

１．６群（西より）

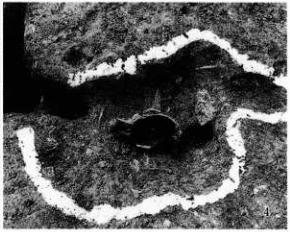
２．６群
ＳＸ６焼土（南より）
３．６群
ＳＸ６焼土断面(西より)

４．６群
ＳＸ７焼土断面(南より)
５．６群　ＳＸ７（東より）

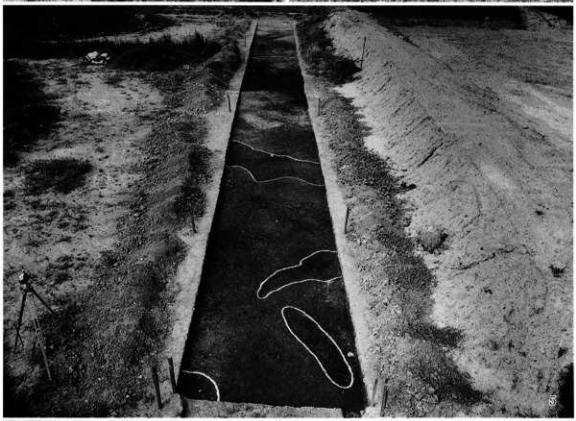
６．６群　ＳＸ３焼土
７．６群
ＳＸ３断面（西より）

図版６
１区・２区

１．５群（西より）
２．６群
ＳＸ５断面（東より）

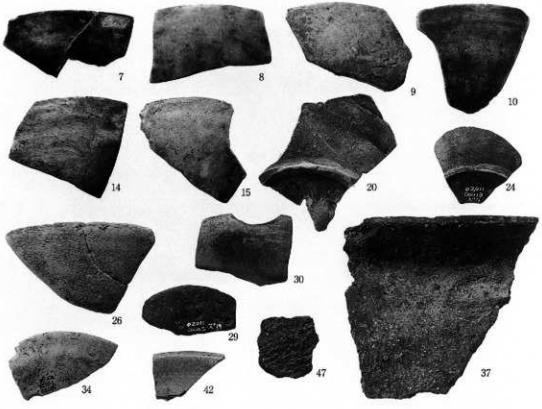


３．７群（西より）
４．７群
ＳＸ１遺物出土状況(西より)

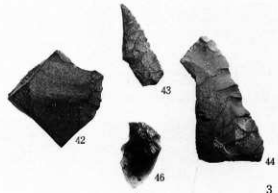


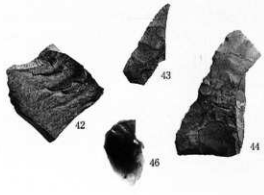
５．２区全景（西より）

６．２区基本断面（東壁）



1．1区包含層出土遺物





2．樹木根痕跡7群　ＳＸ１出土遺物
3．1区　石器表面
4．1区　石器表面